読みの困難を抱えた児童への読書活動での活用⑦ ～学校図書館との連携で広がる読書環境②

島根県安来市立荒島小学校
教諭　井上 賞子

研究目的

読みの困難を抱えている対象児童に対し、音声の補助がある読書環境を整えていくことで、本の世界を楽しむ体験につなげていく

活用実態

昨年度までの取り組み概要

「わいわい文庫」が、読みに困難のある子どもたちにとって有効な手段であることは、長く実感してきています。一方で、必要な子どもたちがいるにもかかわらず、「活用の継続や広がり」には、ずっと有効な手立てが打てず悩んでいました。

＜わいわい文庫活用時の課題＞
・ドライブのない端末で見るためには、あらかじめデータを端末に入れておくことが必要になる。
・書影ポスターで読みたいものを決めても、そのデータを探し出してインストールするのにいくつもの行程が必要で、なかなか日常化することがむずかしい。

それが昨年度、大きな転機を迎えます。１人１台の端末と校内Wi-Fi環境が整ったタイミングで、「わいわい文庫」が国会図書館に収蔵され、学校図書館を経由して、個人の端末に貸し出すことができるようになったのです。

昨年度の事例集を書く段階では、取り組みを始めて数ヶ月という短い期間ではありましたが、「オンラインでの貸し出し」「自分の端末で自分のペースで読める」が可能になったことで、

①読みたいと思ったものをスムーズに貸し出してもらえる
②（提供する側が児童の端末へのインストール管理までしなくて良くなったことで）学校図書館を利用することができるようになった

という、読みに困難がない子どもであれば当たり前に保障されていた環境を、やっと整えることができました。「わいわい文庫」を読んだ場合でも、図書館で借りた他の本と同様に記録に反映できるようになったことも、「もっと読み

たい」というモチベーションにつながっていきました。
（「わいわい文庫活用術10」25ページ参照）

今年度の実践

そこで今年度も、「国会図書館から学校図書館を通じて『わいわい文庫』を対象児童個人の端末に貸し出す」ことで、読みの困難を抱えた子どもたちが「日常的に読書を楽しめる」環境の構築に継続して取り組みました。

成果

知的障害特別支援学級Ｂさんの姿から

＜昨年度初めの状態（２年生）＞
- 発語が少なく、困っていることもやりたいことも伝えるのがむずかしい。
- 図鑑が好きで、よく眺めている。
- 魚や恐竜の名前に興味があり、よく知っている。
- 図鑑の写真を指差して、読んでほしいと支援者に促す姿が見られる。
- 知っている名前が出てくると喜んだり、内容を聞いて「何で？」「どこ？」など、質問してくることがある。
- 本に興味はある様子だが、文字の学習には拒否感が強かった。

＜文字の学習への取り組み＞

年度当初は拒否感が強かった文字学習ですが、本人の興味・関心の高い魚や恐竜を教材化して取り組む中で、読める文字が増えていきました。すると、Ｂさんがまず始めたのは、図鑑を見て自分の知っている魚の名前を読むことでした。ずっと自分で読みたかったんだなと感じた瞬間が、下の写真の場面です。

Ｂさんはもともと「わいわい文庫」も大好きで、古いノートパソコンでCD-ROMから再生させて視聴していたという話は、１年生の時からかかわってくださっている支援員さんから聞いていました。しかし、端末はみんなでシェアしていたため、必ずしもＢさんが読みたいと思っているものが読めなかったことや、大人が準備してくれないとできない活動であったこともあり、自発的に「読みたい」と求めてくることはなかったそうです。

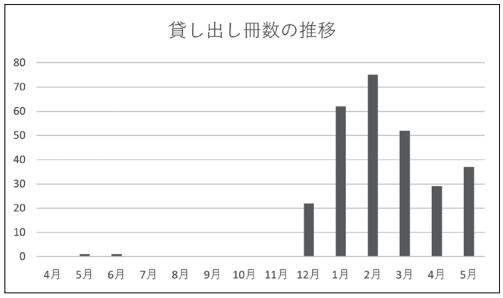
読み聞かせも好きですが、自分から

本を選んで「読みたい」という意思を示すことはなく、図書館に連れていくと、やはり手に取るのは図鑑でした。

そんなＢさんに、端末への貸し出しを始めたところ、毎日のように自分から「わいわい文庫」の視聴を求めるようになっていきました。

書影ポスターからリクエストする本を選んでいく際も、何度もファイルをめくりながら、じっくり吟味し、「ど・ろ・ぼ・う……」と読めるようになったばかりの文字を拾い読みしながら選んでいく姿が見られました。

読書の楽しさを実感したＢさんの貸し出しは、どんどん増えていきました。個人端末への貸し出しを開始したのは12月でしたので、下のグラフを見ていただければ、その違いは一目瞭然です。

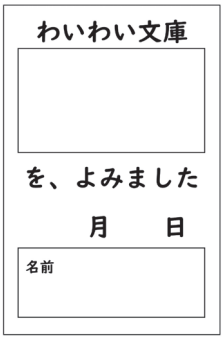


貸し出し冊数の推移

今年度に入ってからは少し落ち着きましたが、本格的に読み始めた３学期は、毎日ものすごい冊数を集中して読んでいました。３学期にＢさんの借りた本の数は、学年１位でした。その姿からは「本当に読みたかったんだなあ」「自分のペースで読めるのが嬉しくてたまらないんだろうなあ」ということが伺われました。

また、これだけの冊数を読むことができたのは、Ｂさんの「お気に入りの本を何度でも読みたい」という気持ちが関係しています。

リクエストした本は、学校図書館が国会図書館から貸し出しを受け、学校のChattyBooksアカウントにアップされ、それを子どもたちは自分の端末にダウンロードして読みます。Ｂさんの端末のChattyBooksアプリには、彼のお気に入りの本がずらりと並んでいきました。



よみましたカード

１冊１回読み終わると、「よみましたカード」を持って図書館に向かいます。司書さんはこのカードを元に「貸し出し」のカウントをしてくださいますので、毎日のようにお気に入りの本を何冊も読み、さらに新しい本をリクエストしていくＢさんの貸し出し記録は、どんどん増えていきました。

こうした「読書の時間」は、おもに「予定の学習が早く終わった時」にとっていました。「わいわい文庫」が早く読みたくて、学習課題に集中して取り組む姿が増えてきたことも、嬉しい姿でした。

何度も読んでいるお気に入りのお話は、登場人物のセリフを正確に覚えて、感情たっぷりで読み上げの声にかぶせて一緒に読み上げて楽しむこともありました。

Ｂさんが『三びきのやぎのがらがらどん』を視聴している様子

写真は、大きいやぎのがらがらどんのセリフを読み上げに合わせて語っている姿です。大迫力で、初めて聞いた時は思わず周りにいたみんなが拍手したほどでした。

どんどん、読書がＢさんの日常のお気に入りの時間になってきています。

・端末が見やすい台を準備してセット
・パスワードを入力してログイン
・アプリを立ち上げて本を選ぶ
・再生ボタンでスタート

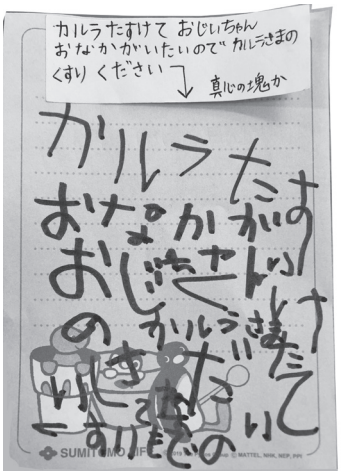
という読むための準備も、一人でさくさくとできるので、「読みたい時に読みたい本を読む」ことができます。

読書量の増加とともに、日常の生活や学習の中での「読む力」もどんどん上がってきています。短い文章であれば一人で読んで内容を理解することができるようになってきていますし、目に入る看板やポスターなどの文字もよく読んでいて「これは何？」と聞くことも増えました。

また、文字で伝えるということにも、意欲が高まってきています。

それまでは、文字の習得が進んでも、好きな恐竜や魚の名前を書くぐらいで、国語の学習時もなぞり書きから少しずつ短い単語を見て書くからなかなか進まなかったのが、「紙に書いて伝える」という姿が見られるようになってきました。

黒板に「とりけらとぷす」と恐竜の名前を書いているところ



上は、大好きなおじいちゃんの体調が悪かった時、お気に入りの強いキャラクターにおじいちゃんを助けてとお手紙を書いた時のものです。「いつの間にかこんなものを書いていました」とお母さんも驚いておられましたが、自分一人で書いていたそうです。いまでは、「…を買ってきてください」など、お願いがある時は、よく自分からメモを書いているとのことでした。

「言葉の力の広がり」「文字を介しての情報の共有の日常化」は、日々の学習でも目指してきたものですが、こうした姿には、今回取り組んだ貸し出しシステムが支えてくれた「豊かな読書生活」の影響が少なくないと感じています。

＜取り組みを振り返って＞

「オンラインでの貸し出し」「自分の端末で自分のペースで読める」が可能になったことで、Ｂさんの生活の中に「読書」がお気に入りの活動として定着していきました。そしてそれは「言葉の広がり」にもつながっていったと感じています。

この貸し出しシステムは、承認館になっていれば、地域の図書館でも行えます。つまり、Ｂさんが学校を卒業してからも読書を継続して楽しむ方法として使えます。

多くの子どもたちが、学校図書館での体験を大人になってからも地域の図書館を活用する際に生かしているように、Ｂさんの読書も、学校図書館での体験が未来につながっていってほしいと願っています。

来年度に向けて

学校図書館が、どの子どもにとっても読書を楽しめる場になるうえで、昨年度から行っているこの取り組みは有効だと感じています。一方で、「一人ひとりの端末に貸し出すことができる」という方法の情報が、まだまだ届いていない学校も多いです。そこで、来年度以降も、啓発活動を継続したいと思います。

以下のQRコードは、2022年度の日本LD学会の自主シンポジウムで発表した際の資料のダウンロード先です。よかったらご利用ください。